様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４２０６２３

研究課題名（和文）城下町都市における文化的景観と近代的都市景観の相克

研究課題名（英文）Conflict of cultural landscape and modern urban landscape in the castle town city

研究代表者
野中　勝利（NONAKA, Katsutoshi）

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：４０３０２４００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：城址の濠の埋め立てにおける賛否の議論と経過からみた風致保存の性格、天守閣の保存利用と建設構想からみた近代都市景観の創出、城址の公園化にみられる文化的景観の断絶などの実態を明らかにした。現在の都市空間は、このような近代化過程を経て、都市づくりの積み重ねによって形成された。本研究では、近代都市社会における市民生活上の都市施設としての欲求と議論を文脈的に解読する方法論を示すことができた。そして今後の都市づくりに価値づける枠組みを獲得した。

研究成果の概要（英文）：In this study was to clarify the following points: character of the scenic beauty preservation as seen from discussion and process in the landfill of the moat of the castle, creation of the modern cityscape judging from use of preservation and construction design of the castle tower, and break of the cultural landscape found in the park of the ruins of a castle, etc. The current city space was formed by the accumulation of making of city after such a modernization process. In this study, I was able to show methodology to decode a desire and the discussion as the municipal facilities in the civic life in the modern city society contextually. And we won a framework for characterizing value to the future of urban development.

研究分野：都市計画

キーワード：城址　近代化　景観

１．研究開始当初の背景

わが国の都市の多くは近世城下町を基盤として形成された、いわゆる城下町都市である。近時、木造天守閣の復元、水濠の浄水化、藩政期の濠の復元、伝統的建造物の保存や歴史的街道の景観整備など、城下町都市では城址への投資がされている。

こうした城址を中心とした城下町都市の都市づくりの取り組みは、近世城下町を基盤とする既成市街地（旧市街地）を中心としたコンパクトシティへの志向にも合致する。このように城址を中心とした既成市街地のもつ求心性や再価値化を通じた、都市づくりの計画方法論の再構築は極めて時機を得た研究課題である。

わが国固有の都市基盤である近世城下町を起源とする城下町都市の明治以降の都市づくりを文脈的に解釈し、その延長上で計画論へと応用する方法論の確立が求められる。

２．研究の目的

本研究は景観形成を視点として、歴史的環境を基盤とした「文化的景観」の形成と都市の近代化を背景とした「近代的都市景観」の形成による『相克』から、近代都市づくりの意味づけを行い、これからの都市づくりに正当に価値づける方法論の構築を目的とする。

３．研究の方法

地方の城下町都市の近代化過程における景観形成の思想を、当時の都市社会や市民生活との関係から分析することで文脈的に明らかにする。

景観形成を次の二つの側面から捉える。一つは近世から受け継ぐ環境基盤の継承・保全と創出による「文化的景観」の形成であり、もう一つは近世からの断絶を伴う破壊と創造による「近代的都市景観」の形成である。これら二つの『相克』の関係を、当時の都市社会における位置づけや意味、そして市民生活における受け止め方から明らかにする。文脈的な解釈はこの分析の枠組みを設定して行う。

４．研究成果

（１）文化的景観について

現在の城址で藩政期の濠がそのまま保存されている例はない。その意味では近代化過程は濠の埋め立ての歴史でもある。その契機は、不衛生な面、交通上の妨げとなる面などの理由や、宅地化、道路・鉄道の敷設などに伴うことなど、理由は様々である。近代の都市づくりにおいて、こうした取り組みが進む一方、市民サイドからは史跡保存のために埋め立て反対の運動や世論の高まりなどがあった。

近世から受け継ぐ環境基盤の一つである濠について、埋め立てて近代的都市景観を創出しようとする動きに対し、それを阻止して環境基盤の継承と保全を図ろうとする取り組みの構図を実態的に明らかにした。

小田原では、1920 年代に神奈川県が濠の埋め立てを伴う城址での学校建設計画を主導していた。小田原町当局、小田原町会ともに県の意向を前提とした計画を追認するような姿勢だった。そのため県と反対派町民との間に挟まれ苦悩した。町会は調停者や同盟会代表者らと連名で、反対派の意向を含めた内容の覚え書きを作成し、一旦は折り合った。しかしその内容は、県から一蹴されてしまった。最後は、県から示された妥協案を携え、反対派と同席するはずだった町民大会を回避し、声明書を発表することで自らの立場を弁明した。

反対同盟会は当初からの目的を堅持し、主張を曲げなかった。しかし組織内部の意思統一が続かず、濠の埋め立てを中止させることを成果として解散した。

激化する対立をみかね、両者の間を調整するため地元の名望家たちが調停者となった。

これら三者は相互に何度も協議し、またそれぞれに県に出向いて陳情するなど主体性をもった行動をとっていた。一方、反対運動に参加していない町民の中には冷ややかな姿勢がみられた。

このようにそれぞれの意識や取り組みと相互の関係、その過程が明らかになった。

また城址の公園化において、藩政期からの空間履歴や城址が有する風致との関係から、その経過や計画について分析を行った。

小田原城址は「存城」として陸軍省の所管になり、城郭建築は取り崩され、石や木が建築用材などに転用された。政府は意向の保存に関心はなく、風致保存の考えもなかった。

1890 年に旧藩主大久保家に払い下げられると、小田原町は一部を無償で借り受け、残りを買収した。ただし積極的な風致保存の考えはみられず、そのままの状態で一般に開放して旧観の保存とした。

その後、御用邸用地として宮内省の所管になり、城址の風致を活かした皇室地とした。

このように積極的な風致というよりも、そのままの状態を維持する消極的な風致の維持だった。

関東大震災後、その復興過程で、濠の埋め立てを伴う城址での学校建設計画が生まれことで先述のような反対運動により、濠の埋め立ては阻止された。積極的な風致保存の取り組みといえる。

また秋田、盛岡や徳島の城址の公園設計をみると、藩政期から受け継ぐ風致を活かす設計方針をうたっているが、植栽計画は従前の植生との関連は少ない。公園化にあたっては、城址のもつ文化的景観の継承や保存の思想は可視化されなかったことが明らかになった。

（２）近代的都市景観について

城址に建設される模擬天守閣は近代的都市景観の創出である。明治維新期に取り壊さ

れた天守の復活、あるいは藩政期に建設されなかった天守を創造する行為は、近代都市社会における欲求から生まれた。

大阪などでＲＣ造により建設された模擬天守閣は当時の先端技術による表現でもある。

ただし建設の構想があっても実際には建設されなかった例も少なくない。これらは直接的には建設資金が確保されなかったことが要因であるが、建設構想自体は、当時の地域社会の世論から生まれたものである。城下町都市としての象徴として、求心性を有する模擬天守閣が望まれた。近代的都市景観の創出による地域の一体化が志向された。

保存された天守は文化的景観の継承であるが、その利用からみると大きく二つに性格が分かれる。

一つは消極的な継承である。いわゆる山城の頂にある天守はアクセスが容易ではなく、また小規模なため、そこを訪れる人も少なく、認知度も低く、そのため維持管理もままならなかった。

もう一つは積極的な保存である。名古屋や姫路の天守は政府の支援を受け、改修事業により維持された。また和歌山城址や福山城址などの天守のように内部が公開され、場合によっては古器物の展示がされ、地域社会に開かれた。彦根城址では博覧会が開かれるなど、近代都市社会における都市施設として、都市住民が出入りする近代都市景観が生まれた。

公園は近代的土地利用の一つである。城址の公園化は先述のように積極的な風致の保存ではなく、また園内の遊歩道や施設配置などは、藩政期からの空間履歴を考慮した設計にはなっていなかった。史跡としての文化的景観の保存という意識よりも、近代的都市景観としての公園化に重きが置かれていた。都市社会における都市施設としての公園に意義が求められていた。

（３）相克とまとめ

封建社会では近世城下町の土地利用は明確で、人々の行動には制約があった。そのため藩政期の濠や川の架橋は限定的だった。維新以降は社会的、空間的な開放から新たな架橋を必要とし、それが可能になった。近代技術の発達などにより、従来の木製から鉄製などに架け替えられた。橋のデザインの継承性や文化的景観の保全などの観点から、その設計には賛否の議論があった。

これは先述の濠の埋め立てによる議論とも重なる。小田原では先鋭的な反対運動により差し止められたが、甲府や熊本などのように反対意見は出たものの埋め立てられた例もある。また和歌山では反対意見が強く、一度は埋め立て計画が阻止されたが、その後、結局埋め立てられた場合もある。

いずれにしても現在に残る都市空間は、こうした近代化過程を経て、都市づくりの織り重ねによって形成された。

本研究では、近代都市社会における市民生活上の都市施設としての欲求と議論を文脈的に解読する方法論を示すことができた。そして今後の都市づくりに価値づける枠組みを獲得した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１３件）

① 野中勝利、岩手県による岩手公園の整備と維持管理における長岡安平による公園設計の受容性、都市計画論文集、査読有、51 巻 1 号、2016、108-117

② 野中勝利、「廃城」後の城址における公園化の契機と経過、ランドスケープ研究、査読有、79 巻 5 号、2016、419-424

③ 野中勝利、徳島城址における公園整備の初動期の経過と本多静六による公園設計との関係、都市計画論文集、査読有、50 巻 2 号、2015、260-271

④ 野中勝利、盛岡市による盛岡城址の岩手公園買収の経過と背景及び公園の維持管理、都市計画報告集、査読無、14 号、2015、119-126

⑤ 野中勝利、近代の秋田（久保田）城址における公園設計・改良設計後の秋田県による公園整備の経過、ランドスケープ研究（オンライン論文集）、査読有、8 号、2015、45-57
http://doi.org/10.5632/jilaonline.8.45

⑥ 野中勝利、近代の徳島城址における公園化の背景と経過、都市計画論文集、査読有、50 巻 1 号、2015、69-80

⑦ 野中勝利、近代の秋田（久保田）城址における公園化の背景と経緯、ランドスケープ研究、査読有、78 巻 5 号、2015、431-436

⑧ 野中勝利、小田原及び高山での構想を含めた模擬天守閣の建設構想とその背景−戦前の地方都市における模擬天守閣の建設に関する研究その５−、日本建築学会計画系論文集、査読有、706 号、2014、2679-2688

⑨ 野中勝利、1890 年の「存城」の払い下げとその後の土地利用における公園化の位置づけ、都市計画論文集、査読有、49 巻 3 号、2014、1053-1058

⑩ 野中勝利、熊本、萩及び若松における城址での模擬天守閣の建設構想とその背景−戦前の地方都市における模擬天守閣の建設に関する研究その４−、日本建築学会計画系論文集、査読有、700 号、2014、1345-1354

⑪ 野中勝利、近代の小田原城址における所有と利用の変遷及び風致保存の思想、ランドスケープ研究（オンライン論文集）、査読有、7 号、2014、32-40
http://doi.org/10.5632/jilaonline.7.3

⑫ 野中勝利、近代の小田原城址における県立公園構想の背景と経過、ランドスケープ研究、査読有、77 巻 5 号、2014、419-424

⑬ 野中勝利、近代の小田原城址における濠の埋め立てをめぐる議論の構図、都市計画

論文集、査読有、48 巻 3 号、2013、495-500

〔学会発表〕（計１件）
① 野中勝利、長岡安平の公園設計に基づく岩手公園の整備、日本造園学会関東支部大会、2015.11.22、日比谷公園緑と水の市民カレッジ（東京都千代田区）

６．研究組織
(1)研究代表者
野中　勝利（NONAKA,Katsutoshi）
筑波大学・芸術系・教授
研究者番号：４０３０２４００